

事例 23 単元 「発見したことを伝えよう（話すこと・聞くこと）」

スピーチの会を開く

国語 第1学年
川北町立川北中学校

1 事例の概要

本校の活用力向上の研究では、題材や問題への関心・意欲を高めることが、題材や問題への認識を深め、疑問を起し課題を見つけ、解決や探求の過程において資料や事実を正しく理解・分析し、表現し伝えようという態度や力の育成につながると考える。その学習の満足感や達成感が、さらに学習意欲につながり活用力を向上させるのである。つまり、各教科において、関心・意欲を高める工夫を授業に取り入れ継続すれば、生徒の思考力や判断力、表現力が育つとともに、関心・意欲が態度まで高められるようになって考えている。また、授業においては、生徒が学習する場としてクラスや学年がどのような集団であるかが重要である。そこで道徳や学級活動を通しての集団づくりにもあわせて取り組んでいる。

活用力の1つである表現力において、話す力はどの教科においても重要である。ここでは、各教科の実践の一例として、国語科の話す力の育成の取り組みであるスピーチの授業実践を報告する。

スピーチの学習では、誰かに話したいと思わせる動機づけが大切である。あたらしく得た「発見」は興味深く話すことのできる素材として生徒の関心と意欲を喚起するものである。

「小学校と中学校のちがい」のスピーチは、生徒にとって最も豊富な実体験を伴うことがらである。中学校入学後の生活を振り返らせ、その中からスピーチしたいと思う事柄を1つにしぼり、聞き手に言いたいことが伝わる工夫を考えさせながら、スピーチすると同時に、話を聞き、その内容を自分と照らし合わせて考える聞き手としての意識を高めることを目標に授業に取り組んだ。

人前で話すことに少なからず抵抗を感じる生徒もみられるので、小グループでの発表の場をもうけた。

また、「読む」スピーチメモではなく、「話す」ためのメモを作らせ、自分の言葉で、自分の気持ちをスピーチできるように取り組んだ。

A-1 学校研究

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・自らの話題を探し、自分の考えや気持ちを進んで表現しようとする。
- ・自分の考えや気持ちを話すために、ふさわしい話題を選ぶことができる。
- ・自分の考えや気持ちが伝わるように、工夫しながら話したり、友だちのスピーチに耳を傾け、自分の体験と比べながら聞くことができる。
- ・話す速度や声の大きさ、言葉の調子や間の取り方などを工夫してスピーチすることができる。

(2) 指導上の工夫点

【活用力を向上させるための関心・意欲を高めるための工夫】

- ・原稿を読むのではなく、メモをもとに話を構成できるように、ワークシートを工夫する。
 - メモのワークシートには、単語・矢印・話す速さ・声の大きさ・言葉の調子を書く。
- ・話し相手を少人数グループにし、話をすることに対する抵抗感を少なくする場面をもうける。
 - 列の前後の2人でお互いに話役と聞き役にわかれる。
 - 1分間で発表するという目標をもたせる。

B-1 評価計画

3 指導の実際

学習活動	主な発問 (●) と指示 (▲)	教師の支援 (◎・○・△) と評価 (☆)
<p>ふかめる</p> <p>話す内容にしたがって、スピーチメモを作ろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 効果的なスピーチになるよう工夫しながら、メモを作る。 <p>作ったメモをもとに、スピーチの練習をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 少人数でグループを作り、メモをもとにスピーチの練習をする。 お互いに聞き合い、アドバイスをを行う。 アドバイスをもとに、スピーチメモの見直し、手直しをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●前時のスピーチの構成をもとに、スピーチメモを作ろう。 ▲スピーチメモの例を参考にしてみる。 ▲声の大きさや、話すスピード、調子なども書き加えみる。 <ul style="list-style-type: none"> ●少人数のグループで、順番にスピーチの練習をしよう。 ▲お互いにスピーチを聞き合い、良い点や改善点などをアドバイスする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習課題をおさえる。 <p>◎○例を参考にしながら、自分で工夫するように促す。 △例を参考にしながら、同じように作るように促す。</p> <p>☆意欲的にスピーチメモを作ろうとしている。(関心・意欲・態度)</p> <p>☆積極的にスピーチの練習をしたり、アドバイスをしたりしようとしている。(関心・意欲・態度)</p>

C-1 指導案

C-2 ワークシート

C-3 生徒のワークシート

4 成果と課題

(1) 成果

生徒は、スピーチ用のメモをつくることには慣れていないので、最初に黒板でメモの例を示すと、それを参考にしながらメモをつくることができた。また、メモ作成の時間を多めにとり、机間指導の声かけによってメモをつくることができた。スピーチ練習は2人でお互いに1分間ずつ行い、スピーチが終わると、相手のスピーチについてアドバイスをおこなった。生徒は1分間という制限の中で集中的にスピーチに取り組むことができた。スピーチ後すぐの聞き手からのアドバイスは自分のスピーチがどのようなものであったかよくわかり効果的であった。また、アドバイスをしないと聞けないのでよく聞くことにもつながった。この授業を通して、スピーチ文章をメモにする思考力、話す速さ・声の大きさ・調子を考えた表現力、聞きやすさを判断する力が養われたと思われる。

(2) 課題

この授業において、さらに活用力向上につながる関心・意欲を高める工夫として考えられることは、導入部分において、メモなしでスピーチし、うまくできないことを示してメモの必要性を認識させることや、よいスピーチとはどのようなものかをビデオでみせるといったことである。また、スピーチ練習の時に声の大きさや話すスピードなどの観点や国語科の5観点(相手意識・目的意識・場面意識・方法意識・評価意識)を示すと、表現力や判断力を高めあう場になると考えられる。

今後も、各教科において、関心・意欲を高める工夫が、子どもの学ぶ意欲・態度をどのように変容させ、どのように活用力に結びつけたかをアンケート・自己評価・授業観察・課題解決のようす・テスト結果・作品制作・発表・実技を通して検証し、生徒の活用力を育てていきたい。

事例24 単元名 古典に親しもう

活用力を育むために—グループ活動を取り入れて—

国語科 第1学年
七尾市立朝日中学校

1 事例の概要

本校では、本年度より2年間「活用力」向上推進事業「活用力向上推進モデル校」の指定を受け、研究実践を始めた。「自ら考え、豊かに学び、よりよく生きる生徒の育成～確かな学力の向上をめざして～」という研究課題をたて取り組んでいる。

本校の生徒は、学習課題に対して意欲的に考えることができ、音読など大きな声を出すことに抵抗感はないが、自分の意見を発表することは、恥ずかしいと感じているところが見受けられる。小グループ活動を取り入れることで自分の意見を発表することへの抵抗感が和らぎ、また意見交換しながらより考えを深めていくことで、活用力を培うことができると考えた。

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・平安時代の生活や清少納言について知り、古典に興味を持とうとする。(国語に関する関心・意欲・態度)
- ・筆者の季節に対する感じ方やものの見方をおおまかにとらえることができる。(読むこと)
- ・歴史的仮名遣いや古文特有の語について理解できる。(言語事項)

(2) 指導上の工夫点(視点)

① 指導法の工夫

- ・小グループでの話し合い活動を取り入れ意見交換することで、考えを構築していく場とした。
- ・小グループ活動の際、司会者には進行台本を提示し、段階を追った話し合いができるようにした。

② 国語科としての活動の工夫

- ・活用力を育むための6つの学習活動について具体例を考えた。本単元ではⅠ・Ⅲに重点を置いた。
- ・古典の入門期であるため、抵抗感の少ない音読を多く取り入れた。
- ・読むことの目標達成に向け、「私の枕草子」を書いた。その際、清少納言の表現方法を参考にしよう提示した。
- ・互いの作品(「私の枕草子」)を読み、清少納言のどんな表現方法を参考にしたかを考えることで、読みを深める。

③ 学習定着のための工夫

- ・自己評価させる。

B - 1 単元計画

B - 2 活用力を育むための6つの学習活動

3 指導の実際

学習内容・活動	評価場面	指導上の留意点（支援）
1. グループ毎に「私の枕草子」を発表する。清少納言のどんな表現方法を参考にしたか指摘し合い相互評価する。	《活用力場面》 「私の枕草子」で清少納言のどの表現を使ったか、読み取る場面。	・形態を3～4人班にし、発表者は立たせる。 ・司会者には進行の仕方を示す。
2. グループでそれぞれがよく工夫されたところについて意見交換する。	■評価観点④ それぞれが書いた「私の枕草子」を相互評価する交流を通して、季節に対する感じ方を広めている。	・司会者には話し合う事項について、例を示す。（意見・質問を交換するよう促す。）
3. 各グループの「工夫大賞」を選び、「私の枕草子」と工夫について発表する。	《活用力場面》 「私の枕草子」に表現するために意図したこと、選ばれた根拠を説明する場面。	・グループから二人発表者を出し、工夫大賞に選ばれた人が「私の枕草子」を発表し、一人が工夫点を解説する。 ・実物投影機を使い、発表していることが全体にわかるようにする。
4. 自己評価する。		

C - 1 指導案

C - 2 ワークシート

C - 3 進行台本

4 成果と課題

(1) 成果

- ・書く活動や話し合う活動で思考すること、判断すること、表現することを段階的に示すことで生徒たちは手がかりを得て学習することができた。
- ・小グループ活動を取り入れたことで発言量が増えた。それは、進行台本を示すことで、述べる機会の設定→自分の考えと相手の考えを比べる→相手の考えを理解し、自分の考えを伝達するという方法を習得し、別の機会にいかすことができた。
- ・グループの意見をまとめなければいけないという場面では生徒たちはいろいろな視点を出しあい、よく思考することができていた。

(2) 課題

- ・グループ活動では、そのねらい、メリットを明確にしなければならない。
- ・グループ活動では、リーダー養成とともに学ぶ集団を高めるため構成員の在り方を教え、気づかせる必要がある。
- ・グループでの話し合いはゴール（見通し）を持って交流しなければならない。活動することによってどんなよいことがあるのか示す必要がある。
- ・グループ活動で交流することが意味のあるものであることを示すためにも、次の話し合いに入る前には褒めてあげることが大切である。その方法も口頭で褒めるほか、板書することもよいのではないか。板書したことは注目する。褒めることで全体の交流にもなり、生徒はヒントを得ることができる。
- ・マニュアルから離れたところに本当の思考がある。話し合い活動を今後も取り入れたい。

事例25 単元（真実を語る「未来をひらく微生物」）

『説明の技』に注目して読みながら書く説明文学習

国語科 第1学年

珠洲市立三崎中学校

1 事例の概要

入学当初の生徒達は、授業の集中が続かない状況であった。生徒の実態に合った授業ができていないからだとして反省し、生徒の実態に合わせながら課題の精選とスモールステップ化を図った。本校の学校研究にかかわっては、国語科では漠然としがちな学習の対象を明確にすることで、効果的な「思考、判断、表現」が可能となると捉えた。本単元では、この説明文で身に付けたい「説明の技」を「習得」したい基礎として提示し、本単元でしっかりと身に付けましょうと呼びかけた。文章の内容を読み取りながら、「説明の技」の効果を理解したり、自分達でもそれらを使って書いたりした。「説明の技」を使って何度か書くことで、確実に身に付けることをねらった取組である。

A-1 学校研究

A-2 構想図

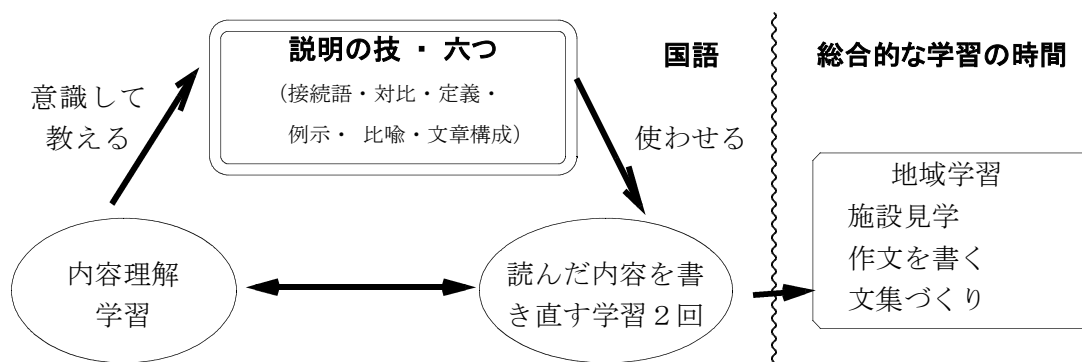
2 実践内容

(1) 単元の目標

内容を読みとるだけでなく、「説明文の表現の特徴」を理解し、「説明文の学び方」を身に付けること、具体的には「接続語」「対比」「定義」「例示」「比喻」「文章構成」という六つを習得すべき「説明の技」として設定した。それらを使って、読みとった内容を、条件に従って書き直すことができるようになるというのが目標である。

(2) 指導上の工夫点

①指導法の工夫



ア 説明文学習の「習得」すべき「説明の技」を設定した。

イ 読みながら書く学習を繰り返した。

ウ 徐々に高いレベルの課題を与えた。

エ 地域学習に繋がった。

B-1 単元計画

B-2 指導上の工夫

②授業構成の工夫

ア 「学習課題」を明記し、「自己評価」するというスタイルの徹底

イ ペア学習・グループ学習の重視

ウ ノート指導の重視

3 指導の実際

学習の流れ	学習の内容&学習活動	指導上の留意点	評価◎支援○
導入 8分	<ペアで音読をする> <あなたはどちらの「歯ブラシ」「水切りネット」を 買いますか?>	・大きな声でゆっくりと ・実物を見せる	
展開 35分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> 生分解性プラスチックとは何だろう? 普通のプラスチックと比べて<u>どんな</u>違いや特徴が あるのだろう? </div> <教科書を読んで、グループでまとめよう>		

C-1 指導案

C-2 ワークシート

C-3 生徒作品

C-4 文集抜粋

C-5 生徒ノート

4 成果と課題

(1) 成果

生徒の作品、学習後の自己評価と感想から成果を分析した。二つの書き直し作文に取り組み、最後には地域の環境施設を紹介する文集を全員で作ることができた。生徒の多くは学習が進むにしたがって自己評価が高くなっている。実際の生徒の作文でも「対比」や「例示」、「定義」を使って書くことができていた。また、文集では「文章の構成」を意識してどの生徒も書き上げることができた。ただし、「説明の技」については自己評価は低い項目も見られる。しかし、意識して学習することができたことはわかる。生徒の感想でも「作文が上手に書けた」「書く力がついた」とする内容が多い。「説明の技」に対する不安も見えるが、「○は分かるけど、○は分からない」と限定して述べていることから、学習対象を意識化して、自分の力を客観的に捉えていることが分かる。生徒の不安は、今後、機会を捉えて指導を行っていくこととする。

「どんな学習をすれば、どんな力が付くのか」を意識させ始めてから、国語の学習に対する積極性が生まれた。また、学習の積み上げを確かめながら進めて行ったところ、「やればできる」という実感も生まれてきたようだ。学習の定着に時間がかかる生徒も、「何をどんな順番でするか」を理解すれば、素早く取り組めることが分かった。また、短時間で学習が進む生徒も「目的」と「評価規準」を知れば、工夫を加えて粘り強く学習できることもわかった。

D-1 自己評価

D-2 学習後の感想

(2) 課題

学習意欲が増したとは言え、自分から課題を探したり、それ以上に学ぼうとする生徒は数少ない。また、国語科と他教科を関連づけたり、生活上のことと結びつけて取り組もうとする姿勢もまだまだ不十分である。一方、授業者側の課題として、筆者の論理や発想の豊かさを積極的に扱う説明文学習を考えていかねばならないだろう。今後は、個人の力に合った課題を自ら設定し、自ら進めていける学習の実現を目指していきたい。

5 その他

E-1 参考文献

短歌の表現を味わおう

～テキストから情報を取り出そう～

国語 第2学年
加賀市立錦城中学校

1 事例の概要

本校は「確かな学力」としての「生きる力」の育成をめざした研究を、ここ10年続けている。従来の「基礎・基本」を大切にした授業づくりに加え、近年は生徒達がこれまで学び、身につけてきた知識・技能を活かして課題に取り組む授業づくりにも取り組んできた。

そのような授業を目指すために、今年度は「PISA 型読解力」を視点とした授業づくりに全教科で取り組んでいる。

国語科でも、「PISA 型読解力」が求める様々な力の育成のためにどのような学習活動が考えられるのかを教科部会で検討しているが、まずは生徒が「書かれている文章」から「情報」を正確に取り出せることが必要であると考え。そのため、根拠に基づき考えや意見を発表する活動を積極的に取り入れている。

A-1 学校研究

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ① 短歌への興味・関心を持ち、表現の豊かさを味わう。
- ② 短歌に用いられている言葉から情景や心情を読み取ることができる。

(2) 指導上の工夫点

- ① 指導法の工夫
 - ・短歌や俳句に苦手意識を持つ生徒は意外と多いので、導入に沓冠の歌など言葉遊び的な短歌を紹介することで、短歌への興味・関心を持たせるようにした。
 - ・短歌をすらすらと正確に暗唱できることが、内容理解への第一歩ととらえ、全員が暗唱できることを目標とした。その方法として、初句から結句までを別々にカードに書いたものを黒板に貼っておき、全員で音読させ、次に結句のカードだけを外して全員で音読させ、さらに四句めのカードを外し音読、という風に徐々にカードを外すことで、音読から暗唱へと切り替えていった。
- ② 「PISA 型読解力」の視点から
 - ・短歌の情景を各自が再構築する際に、漠然としたイメージではなく、短歌に用いられている言葉に根拠を求められるような発問を中心として授業を組み立てた。また、答えをノートにまとめる際には、そう考えられる根拠も書くように指導した。（「情報の取り出し」）
 - ・短歌の語句やリズム、表現上の工夫を見つけ、短歌のPRを書く活動を取り入れた。

（「熟考・評価」）

B-1 指導・評価計画

3 指導の実際

学習活動	指導上の留意点	評価（観点・方法等）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 北原白秋の短歌の音読練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 暗唱できるよう、カードを使用する。 ・ しっかり声を出している生徒を誉め、音読しやすい雰囲気を作る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 季節はいつですか。時間帯はいつですか。 ・ 話者はどこにいますか。 ・ 話者はどんな体勢で色鉛筆を削っているのですか。 ・ 話者の目に一番強く映っているものは何ですか。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 短歌に表現されている情景を読み取る。 ・ 根拠もノートにまとめるよう指示する。 ・ 考えのまとまらない生徒には、アドバイスをする。 	<p>【①関・意・態】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ しっかりと声を出し、音読をしている（観察） <p>【④読む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 用いられている言葉をもとに短歌の情景や心情を読み取っている。 (発言・ノート)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 短歌のPRを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視点（表現上の工夫・リズムなど）を持たせ、考えさせる。 	

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

- ① 一斉音読を繰り返し行うことで、音読練習に対する抵抗感が無くなり、その他の教材においてもスムーズに音読練習に取り組むようになった。
- ② 短歌の言葉から、直接は書かれていない「情景」を考えることで、テキストを「解釈」する力を育成する授業づくりができた。
- ③ 短歌の言葉に根拠を求めて考えることで、「なんとなくそう思った」という曖昧な答えや直感に頼った答えが激減した。また、他の文学的な文章教材においても、叙述に根拠を求めて考える姿勢が見られるようになった。これは、テキストから「情報を取り出す」力が育ちつつあると言える。
- ④ 対立する意見が出た時に、相手の根拠のもろさを指摘する意見が出るなど、「考える」楽しさを味わうことができた。

(2) 課題

「読解力」の育成を考える時、どのような学習活動が求められるのかを、授業者が明確にして授業を組み立てることが重要である。そのためには、「読解力」という言葉で括られている個々の能力を明らかにし、「どの単元（教材）で、どのような能力を」育てられるのか、教科として共通の理解を持たなければならない。とともに、その手段としての学習活動や発問を磨き上げる必要がある。その観点からは、本時の授業はまだ満足のいくものではないし、本校の国語科としての指針も明確なものではできあがっていない。まずは「読解力」を年間指導計画に位置づけ、国語科としてどのような能力を育てるべきなのかを再検討していきたい。

事例27 小単元「2 国の政治のしくみ」

国会のはたらき「衆議院の優越」 －「ガソリン税」の急な値下がり！値上がり！！－

社会科 第3学年

中能登町立鳥屋中学校

1 事例の概要

本事例は、3年生の公民的分野において「法律ができるまで」の単元で、何か身近な話題を使って「衆議院の優越」について考えさせたいと考えた。そこで、前時までに「選挙のしくみ」において『ねじれ国会』の状態にあることを既習しており、前時に「国会のしくみ」について『法律ができるまで』を簡単に学習している。本時では、「ガソリン税」を題材に、ガソリン価格がこの時期に多く変動したことを利用して、「衆議院の優越」についての活用力（思考・判断・表現力）向上をねらった学習例である。

2 実践内容

(1) 単元の目標

「法律の制定」が国会のはたらきの中心であることを理解する。

「法律ができるまで」の資料を参考にして、衆議院と参議院との違いを理解し、衆議院が優越する理由を、資料などを参考に考察する。

(2) 指導上の工夫点

① 指導法の工夫

・本時では、「活用力」向上の手立てとして、具体的な例（ガソリン税）を参考にした課題を小グループで思考・判断し、発表内容を評価し、その作業を通して衆議院が優越する理由を考えさせる。

② 社会科的活動の工夫

・前時までの基本用語をフラッシュパネルとして、導入でくり返し確認する。

・毎時間1名、新聞記事を切り抜いたものにスピーチを付け、授業開始時等に「1分間スピーチ」として、発表する。

・法律ができるまでなどの板書用カードを作成し、授業で使用するほか、フラッシュカードとしても活用する。

・基本的な学習内容、応用的な学習内容のための学習シートを準備し、予習や学習展開の中で使用する。

③ 学習定着のための工夫

ア 学習ルールの定着

・毎時間「1分間スピーチ」をする。学習シートを予習して授業に臨む、など。

イ 社会科的環境づくり

・1分間スピーチやレポートなどの優秀作品の掲示など。

3 指導の実際

段階	学習内容	生徒の活動	・指導上の留意点と◎評価
導入 (10)	1. 1分間スピーチ 2. 国会のしくみについて復習する。	・本日の発表者が、1分間スピーチをする。 ・フラッシュパネルを利用して、これまでの学習内容を振り返る。	・しっかりスピーチできるよう支援し、コメントをつける。 ・自由に大きな声で答えるよう促す。
展開 (35)	学習課題1 どうして「ガソリン価格」が大きく変動しているのだろう。		
	3. 「法律のできるまで」の学習カードを利用して説明する。	・班ごとに学習シートの質問1について考える。 ($120 \times 50 = 6,000$ 円、 $173.8 \times 50 = 8,690$ 円に消費税5%分 434.5 円で約 9,125 円)	・ステージ1～4のヒントから「ガソリン税」を計算する。 ◎ヒントを参考に協力して、考察しているか。(思考・判断) ※月に3回は入れるよねえ!
まとめ (5)	学習課題2 国会でどんな話し合いが行われたのだろう。		
	4. 「衆議院に優越」が認められている理由を資料を参考にまとめる。	・質問2について各自で考え、班で意見交換する。(衆で可決→参で否決→衆で再可決がガソリン価格変動の理由)	◎既習の「ねじれ国会」を理由に衆議院と参議院の意見が異なったことを踏まえ、説明しているか。(学び合い、発表)
まとめ (5)	5. 本時のまとめと次時の予告。	・衆議院に優越が認められている理由を調べ、まとめる。	・学習シートに評価し、提出させる。

C-1 指導案

C-2 学習シート

4 成果と課題

(1) 成果

①指導方法の工夫として、**衆議院** **参議院** **可決** **否決** **成立** **衆議院の優越** **→**など、板書用のパネルを黒板に貼って考察させるようにした。生徒の学習シートでの評価でも、視覚的に考えやすかった、という意見が多かった。

②国会のはたらきを、身近な話題から考えることができ、学び合いながら、普段より意欲的に授業に参加することができた。

(2) 課題

①税込みの価格の計算に手間取り、電卓などを準備すべきであった。

②学習シートを4つのステージにわけて、分かりやすくしたつもりであったが、他の情報に惑わされ、必要な情報だけをつかって、説明しきれていなかった。

既習事項を活かした、「活用力（スケールの長短）」を意識させる授業

数学 第1学年

かほく市立宇ノ気中学校

1 事例の概要

基礎・基本の定着が弱く、自分の考えや思いを表現できないという生徒の実態から、本校では「意欲を持って学習に取り組む生徒の育成ー基礎・基本の定着と表現力をつける指導の工夫ー」というテーマで学校研究を進めてきている。各教科では、学力調査の分析結果を基に生徒の弱い部分を重点単元と位置づけ、確実な基礎・基本の定着と活用力の向上を目指し取り組んでいる。

数学科では、数量関係の領域を苦手とする生徒が多いとの分析結果から、各学年の数量関係の単元を数学科の重点単元とし、基礎・基本となる学習内容の定着を図るための指導のあり方について研究をしてきている。

また、本事例で紹介する第1学年は、小学校での学習内容の定着度が比較的高いため、小学校での学習事項や中学校において前時まで学習した内容を活用する「時間的スケールの長い活用力」と、その授業の学習活動の中で習得したことを活用する「時間的スケールの短い活用力」を意識させる授業展開が模索できると考えた。

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・身のまわりの事象のなかから、比例、反比例の関係を見だし、その関係を表現したり、考察したりしようとする。
(数学への関心・意欲・態度)
- ・ある事象を表した表、式、グラフの特徴と、その事象の具体的な場面を関連付け、事象について考察することができる。
(数学的な見方や考え方)
- ・比例、反比例の関係について、表、式、グラフなどを用いて適切に表現し、その特徴を相互に関連付けてよみとることができる。
(数学的な表現・処理)
- ・変化や対応のようす、グラフの形など、比例や反比例の特徴を理解している。
(数量や図形などについての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点

数学科では、既習事項を活かしながら課題を解決することができる力を活用力の一つと捉え、そこに「時間的なスケールの長短による活用力」の考え方も取り入れてみた。

「反比例」については、小学校では学習していない。そこで、「比例」について学習した経験を踏まえ、「反比例」の学習では、授業の学習活動に生徒同士が教えあい、自分の考え方を言葉・数・図・表・式・グラフなどで表現し伝え合う活動を数多く取り入れ、生徒の考え方を引き出していく場面を多く設けていくようにした。また、教師側から前時までの既習事項のうち、何を活用することで問題が解けたのかについて詳しく考え方を聞き出す場面を増やし、繰り返す中で、自分の意見を、自分なりの表現で他の生徒に伝えていこうとする意欲を賞賛し、それを高めていくようにしていった。このような活動を通して、いわゆる「スケールの長い活用力」を伸ばすことを図った。

また、授業のまとめとして、身の回りにある反比例関係の数量について、考察する場面も設け、十分に時間を確保することで、本時の学習内容を活用していく「スケールの短い活用力」を伸ばす活動も取り入れた。そのため、「比例」の学習から「反比例」の学習への連続性を重視して授業計画を作成した。

3 指導の実際

段階	学習活動	時間	支援（・）と評価及びその方法（ 囲み）
つかむ	1. 本時の課題を知る。	2	・「課題」プレートを提示し、課題を板書することで、課題をつかむ助けとする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 長方形の縦と横の長さには、どんな関係があるのか？ </div>			
追求する	2. 次の条件に合う長方形を見つけ出す。 <ul style="list-style-type: none"> ・面積が 18 cm^2 の長方形 ・（縦の長さ）＝（面積）÷（横の長さ） 3. 長方形の横と縦の長さの変化のようすについて考察する。 <div style="text-align: center;"> </div>	15	・「縦の長さ」が求められない生徒には、計算の方法を提示し、考えの助けとする。 ・活動に取りかかることが出来ない生徒には、教科書にあるグラフ用紙と同じものを「補助プリント」として配布し、考える助けとする。 ・条件にあてはまる長方形の例を、生徒に板書させ、発表しやすい雰囲気づくりに努める。 ・周りの生徒と気がついた点を相談するように促し、新しい考え方が広まりやすくする。
まとめる	6. 日常生活の中から反比例のものを考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・1000円で買える本の冊数と本の単価 7. 次時の予告をする。	12	・1つをとりあげて表をつくり、関係を確認する。
		1	

C-1 本時の展開

4 成果と課題

(1) 成果

- ・教師の支援を考えていく中で、生徒に身につけさせたい活用力に「時間的なスケール」を意識していくことは、生徒に既習事項を想起させる発問の吟味につながり、効果的であった。
- ・単元計画を変更することで、生徒の思考のテンポが良くなった。
- ・生徒同士で相談する学習活動で、問題を解くための糸口を見出せないでいる生徒がほっとした表情を見せた。気軽に話せる生徒同士の教え合いでは、難しい専門的な言葉ではなく、お互いに分かりやすい言葉でアドバイスがされており、学習活動の良いアクセントになった。活用力のみならず、生徒の学習に対する主体性を引き出すことにもつながった。

(2) 課題

- ・小学校で「比例」の学習をした時期が6年生の3学期ということであり、既習事項を想起し、それを活用しながら授業を行なうには、好都合な単元であることを授業後の整理会で初めて知った。その点が事前に分かっていたら、学習活動に教師側からの働きかけに考慮すべき点があったとも考えられるので、活用力を意識した授業を行なう際には、小学校での学習の時期や活動内容等を知っておくことが必要である。
- ・生徒同士が相談しあう場面に入る前に、考えを持ってない生徒に対してカード等を利用してヒントを与え、自分なりの考えを持たせた上で相談させた方が、活動の内容も深まり、評価をする際にも観点を絞り込める。また、理解の早い生徒には発展的な内容のカード等を準備する配慮が必要である。
- ・課題の提示にかかわり「特徴」という表現が使われていた。例えば「長方形の縦の長さが短くなれば、横の長さは長くなる」ということも特徴であるといえる。このように、生徒の考察が教師側の意図する学習活動の方向から違う方向に向かうことになる可能性もあるので、課題には「あいまいな言葉」を避ける必要がある。

「思考力を育て、表現力を高める授業デザイン」

数学 第2学年
能美市立辰口中学校

1 事例の概要

今年度、本校は、「生き生きと学校生活を送り、意欲的に学習に取り組む生徒の育成」という研究テーマを掲げ、「基礎的な力をつけ、それを活用するための授業デザイン」という副題のもと、授業改善に取り組んでいる。その「授業デザイン」の流れとして4つの段階での工夫を考えた。①課題の工夫、②考える時間の保障、③話し合いの場の設定、④まとめ及び学習の振り返りである。それぞれの段階での具体的な工夫点は以下に述べることとする。

A-1 学校研究の概要

A-2 数学科の取り組み

2 実践内容

(1) 単元の目標

この単元は、今までに身につけた図形に関する知識を積み上げ、新たな知識を築き上げていく学習である。そのため、自分で解決法を記述したり、説明したりという場面を多く取り入れられる。そこで、「授業デザイン」という視点では、自分で思考し、それを文字・式で表現することと、その思考の流れを人に伝える表現力を養うため、人との意見交流、発表などの言語活動を取り入れていくことを考えた。

(2) 指導上の工夫点（視点）

① 課題の工夫

今まで身につけてきた知識をいくつか組み合わせることで解決できる、また、解決方法がいくつも考えられる課題を取り上げた。そのような課題であれば、自己思考の時間がどの生徒にも充実したものとなるし、自分の考えを表現することにも意欲を持って取り組めると考えたからである。

② 考える時間の保障

ア 習得済みの図形の性質、根拠として使えるものを、生徒とともに確認しながら、黒板の隅にフラッシュカードで提示しておく。

イ ワークシートは、複数の解決法が記入できるものを用意し、解決したらそれでよしではなく、なるべくいろいろな解決法を考えられるようにする。

③ 話し合いの場の設定

考え方を交流する場としては、初めはペアでおこない、まず、友達に自分の考えをきちんと説明することとする。いろんな解決法があることを理解する。そして、全体場で、図の板書や掲示などを利用して、分かりやすく説明する。

④ 学習の振り返り

「自己評価カード」を記入する。これは、自己の学習を整理させるとともに、自主的な学習のきっかけとするねらいがある。また、指導者にとっても、生徒がどのくらい理解できたか確認する1つの手段と期待できる。

B-1 ワークシート

B-2 自己評価カード

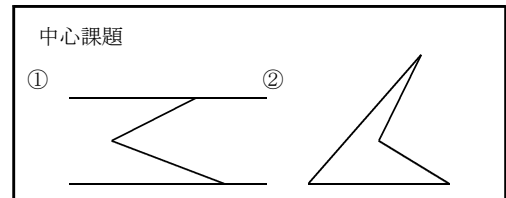
3 指導の実際

<角度をいろいろな方法で求めてみよう>

既習事項

- ・平行線の性質、三角形の内角、外角の関係

これらを活用して



自己思考

- ・ワークシートにいろいろな方法を書き込む

ペア学習

- ・自分の考えを説明
人に説明することで、自分の考えを整理する。
- ・人の考えを聞く

全体発表

- ・自分の考えを黒板で発表

C-1 指導評価計画

C-2 指導案

自己評価カードを書く(ふりかえり)

学習の意欲化

4 成果と課題

(1) 成果

①課題の工夫 及び ②考える時間の保障 について

ア 既習事項を整理・確認・提示したことで、それらの知識を活用するという意識が高まった。

イ 意欲を持って取り組める課題であり、解決方法も多くあるので、生徒の個人の理解度の幅にも対応できる課題であった。

③話し合いの場の設定について

意見交換の場面においては、友達に自分の意見を説明する喜びにあふれていた。そこでの説明が次のみんなの前での説明の準備になっていた。表現力をつける有効な手段と思われる。

④学習の振り返り「自己評価カード」について

ア 文章を書くところで、生徒は学習内容をまとめられたり、自分の考えを整理することができ、自分の理解度を振り返ることができた。

イ 継続することで、生徒は自分の学習の積み重ねを実感することができた。また、教師による毎回のコメントは、学習意欲の向上につながっていた。

ウ 教師にとっては、毎時間カードを点検することは大変ではあるが、授業中でつかみきれなかった生徒の思いや、理解度をつかむことができ、適切なアドバイスができた。

(2) 課題

① 課題の工夫

生徒が考えたいくなる課題は、内容も大事であるが、提示の仕方でも興味・意欲を引き出すことができる。その点も工夫しながら課題については今後も吟味していかねばならない。

② 考える時間の保障

思考過程を大切にするという数学科の重点目標のためにも、思い切ってゆとりのある思考時間の確保はときには必要である。今後、そのような場がどの単元のどこで取れるかを検討したい。

③ 話し合いの場の設定

他人との意見交換は表現力を高める方法として継続的取り組む必要がある。これは、数学科だけでなく、すべての教科で共通して取り組める課題であり、教科どうしの連携が必要となってくる。

④ 学習の振り返り

授業の時間の最後をいつもこのカードの記入に取られるので、継続を図るためには、柔軟な記入の方法を考えていく必要がある。

D-1 生徒の自己評価カード

D-2 生徒のワークシート

確かな学力を身に付け、自らの学びを広げる生徒の育成 －確かな学力の定着を図る指導法の工夫－

数学 第3学年

志賀町立富来中学校

1 事例の概要

本校では、三年前から生徒の「確かな学力の育成」をテーマに学校研究に取り組んできた。研究の重点を「わかる授業の実現」に置き、生徒の学習意欲の向上をめざした指導法の工夫、改善の取り組みがなされてきた。本年度、県教委から「児童・生徒の活用力向上モデル事業」研究実践校に指定されたことから、「確かな学力」を育むために必要な要素として「学びの基本の定着」、「活用力を支える力の育成」、「活用力を向上させる力の育成」の3つを設定し、研究の重点としてそれぞれに具体的な取り組み実践が行われている。その中で数学科として「活用力を向上させる力の育成」に向けた授業実践を紹介する。

本校の生徒は、全国学力・学習状況調査における調査結果から、数学の勉強は大切だと思うが、数学が好きではない生徒や、数学はできるようになりたいと思うが、内容が分からないという生徒が多いことが分かった。そこで、主として活用の問題で、もっとも正答率の悪かった図形領域について、既習の学習事項を活用することで問題解決ができることを体験できる授業展開を進めていくことにした。基礎的・基本的な知識、技能の習得をはかり、さらに、自分の考えに自信を持ってない生徒も、ペア学習など複数で説明し合うことで、互いの考えを深め、判断力・思考力を養い、数学的な表現を用いて相手に伝える力を身につけさせたいと考えた。

A-1 学校研究

2 実践内容

(1) 単元 「図形と相似」

(2) 単元の目標

図形の相似について理解し、それを手がかりに、数学的な推論の意義や方法について理解を深め、図形に対する直感力や洞察力を高めるとともに、図形の性質について論理的に考察し表現する能力を伸ばす。

(3) 指導上の工夫点

① 「学びの基本」の定着

ア 学習規律の習慣化を図るために、『富来中 御定書』の遵守。

② 「活用力を支える力」の育成に向けて

ア 望ましい人間関係を構築し、学びの集団を育成する。

③ 「活用力を向上させる力」の育成に向けて

ア 基礎的・基本的な知識、技能の定着に向けて、音声トレーニングによる既習事項の確認をする。

イ 思考力・判断力を伸ばすため、課題解決型学習となるような問題の精選。

ウ 表現力の育成に向け、ペア学習やグループ学習を意図的に取り入れ、ペア、グループ、全体など活動単位を変えながら、数学的に伝える場面の設定。

B-1 『富来中 御定書』

B-2 「活用力を向上させる力」

3 指導の実践

主な学習活動	(配時)	支援 (○、●) と評価場面・評価方法 (◇)
1. 既習事項の復習をする。	(10)	○既習の学習事項を正確に言うことができるか確認する。(音声トレーニング)
2. 課題の確認をする。	(15)	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 課題 </div> 相似な三角形を見つけよう。		
3. 発展問題に取り組む。	(20)	◇三角形の相似条件を使って、2つの三角形が相似かどうか判断できる。 <div style="text-align: right;">【観察、プリント】</div> ●相似条件にあてはまる辺や角に着目させる。 ○必要となる既習事項を確認させる。 ○話し合いで根拠となる事柄を正確に言えるようにする。 ○感想は一番感じたこと一行に限定する。
<ul style="list-style-type: none"> ・円周角の性質などの既習事項を用いて等しい角を見つける。 ・相似な図形の性質を利用し、辺の長さや角の大きさを求める。 ・小グループで考え方を相談する。 ・考え方を発表する。 		
4. 本時のまとめをする。	(5)	
<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容の問題を解き、一行感想を書く。 		

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

① 「学びの基本」の定着

3年が学年討議を経て、『富来中 御定書』を創り上げたことが、日々の学習態度に反映し始めた。落ち着いた環境で授業に入ることができるようになった。

② 「活用力を支える力」の育成に向けて

仲間づくりの成果で、生徒同士はもとより、教師と生徒間の人間関係も良好に構築されており、わからないところを「わからない」と言える、学びの集団が形成され、さらに、主体的な学びへとつながっている。

③ 「活用力を向上させる力」の育成に向けて

基礎的・基本的な知識、技能の定着に向けて取り組んでいる既習事項の確認は、何度も繰り返すことにより、その成果を徐々に発揮している。取り組む時間を2分間と決め、本時の学習内容と関連のあることにしたため、授業が始まる前から自主的に取り組む生徒も見られるようになった。

ペア学習やグループ学習の後、学級全体に発表する場を頻繁に設定した。生徒が前に出て説明することは、集中した学習場面をつくることになった。

(2) 課題

表現力を身につけることについては、数学的表現を用いてわかりやすく伝えることはまだまだ十分とはいえない。表現力の育成のためには、数学に限らず、全教科にわたり取り組まなければならないことであるが、特に数学科においては、言葉や数、図、式、表、グラフを用いるなどして、根拠をはっきりさせ、筋道を立てて説明することができるように、計画的に取り組んでいかなければならない。まだ、取り組みをはじめて日が浅く、ようやく生徒が動き出したところである。今後の実践を積み重ねていきたい。

D-1 成果と今後の課題

紙コップに人が乗ったら

理科 第1学年
能登町立小木中学校

1 事例の概要

本校生徒は、小学校・中学校とも全学年単級で、人間関係の固定化傾向が強く、友達同士でかわりを持ちながら高め合うことには消極的である。また、全体的に、課題が単純で明確な場合は比較的眞面目に取り組むが探究心や学習意欲が希薄な面がある。さらに、家庭学習時間が少ない生徒が多く、学習内容の定着は十分とは言えない。

このような実態を踏まえ、学び合う楽しさを知り、高め合う集団作りに重きを置き、「学びを生かし、自分の考えを的確に伝え、他の考えを受け止めることができる生徒」をめざし、授業改善の工夫を試みた。ポイントは次の2点である。

- ・友達同士のかかわりの中（グループ）で学習を深めたり、認め合ったりする場を設定する。
- ・言語活動を重視し、思考を深める。

A-1 学校研究

2 実践内容

(1) 目標

圧力の実験を行い、圧力は力の大きさと面積に関係があることを見いだすとともに、空気に重さがあることを調べる実験を行い、その結果を大気圧と関連づけてとらえること。

(2) 指導上の工夫点

① 指導法の工夫

- ・単元の中で1～2時間、表現力を高めることを特に工夫した学習を行う。

指導と評価の計画（総時数9時間：*特に表現力を高めたい学習）

次		学習内容	①関心・意欲・態度	②思考・判断	③技能・表現	④知識・理解
4	1	力のはたらきと力のはたらく面積について考え、2つの関係について図や言葉で表現する。	紙コップの上に人が乗ってもつぶれない現象に興味を持ち、その原因を調べようとする。		*力のはたらきと力のはたらく面積との関係を図や言葉で表現することができる。（ワークシート・発言）	
	2	1 m ² あたりの面を垂直に押す力について理解する。				圧力について理解し、知識を身につけている。（プリント）
	3	空気にも重さがあり、大気圧について考える。		ペットボトルがつぶれる原因を空気の重さと関連づけて考察できる。		大気圧が生じるしくみを理解し、知識を身につけている。（ノート）

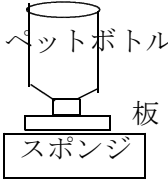
- ・学習したことを言語表現することで思考の再構成を行う。
- ・言語表現の場として小グループと学級全体の場の2つを設定する。

② 理科的活動の工夫

- ・興味や関心の高まる印象的な演示実験を行う。
- ・自分でも確かめられるように実験環境を整える。

B-1 指導と評価の計画

3 指導の実際

学習活動 教師の働きかけと生徒の反応	支援 (★) 評価 (◎) 【評価方法】
実験Ⅰ：板を敷いた紙コップ1個の上に乗る。 実験Ⅱ：板を敷いた紙コップ6個の上に乗る。 実験Ⅲ：スポンジの上に（面積が）小さい板、大きい板を乗せて水が入ったペットボトルを置く。 <div style="text-align: center;">  <p>ペットボトル 板 スポンジ</p> </div>	★演示実験で紙コップがつぶれないようすを見せる。
体重60キロの人が乗ったとき、なぜ紙コップは1個でつぶれ、6個でつぶれないのか、スポンジの実験を踏まえて、わかりやすく説明しよう。	
<ul style="list-style-type: none"> ・個人の考えをワークシートに書く。 ・4～5人のグループで話し合い、意見をまとめ、説明の仕方を相談する。（絵や図、説明の仕方） ・グループの発表 生徒の反応： <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> コップ6個に10キロずつ分散されたから。（言葉で） </div> （発問）・1個に10キロとは言い切れないのではないかな。 ・スポンジの実験とはどう関係するのか分からない。 生徒の反応： <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 支える面積が狭いと集中してつぶれるが、6個になると面積が広がるからつぶれない。（図を用いて） </div> （発問）・スポンジとの関係がわからない。 生徒の反応： <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 紙コップ1個と小さい板の時がいっしょで紙コップ6個と大きい板の時がいっしょだ。（絵が間に合わなくて実際のものを使って説明する。） </div> （発問）・面積との関係で言うとどうなるか。	【活用の場】 実験結果から説明の仕方を考え、理解の得やすい表現を工夫する。 ◎力のはたらきと力のはたらく面積との関係を図や言葉で表現することができる。（技能、表現） 【ワークシート・発言】 ★コップの数を増やすことは、面積を広くしていることに気づかせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 紙コップとスポンジとの関係について発言しようと思欲的な生徒が何人もいた。 </div>

C-1 指導案

1 成果と課題

(1) 成果

- ・グループ学習を取り入れたことで一人一人が主体的に活発に活動し、自信を持って発表していた。
- ・言語だけでなく、絵や図など効果的に用いて分かりやすく説明するグループがあった。

(2) 課題

- ・効果的なグループ学習のあり方
 初めは構成員を固定したり、役割分担をすることで、自信をもたせるようにし、徐々に構成員をかえたり、いろいろな役割を経験させるようにしたい。
- ・的確に分かりやすく伝えきれない生徒が多いので、キーワードや説明パターンを示すなどの具体的な支援を考えなければならない。

事例32 単元「生命を維持するはたらき」(小単元『食物は何に変わるのか』)

科学的思考力を高め、表現する力をつけるための工夫

理科 第2学年

小松市立安宅中学校

1 事例の概要

科学的な見方や考え方を養うためには、自らの考えを周囲と比較し、その差異を確認することが大切であると考えます。しかし、自分の考えに自信を持たず、ワークシート等に記述できずに終わる生徒や発表できない生徒が多いのが現状です。そこで、ビデオ教材や画像のプロジェクター投影による導入で効果的に興味・関心を抱かせるとともに、基礎知識を高める工夫を行うことや考察時に適切なヒントを与えたり、個人での考察を行った後、班で意見を集約したりして再度考察するようにしました。また、発表時での適切に表現する力をつけるために、文頭の言葉をつけるなどの工夫を行いました。

A-1 学校研究

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・栄養分がだ液をはじめとする消化液に消化されるしくみ、そして消化後に吸収されるしくみやそのゆくえに関心を持ち、調べようとする。(自然事象への関心・意欲・態度)
- ・だ液の実験から、糖の生成を推論することができる。また、小腸の内側に多数の柔毛がある理由を、栄養分の効率的な吸収と関連づけて考察することができる。(科学的な思考)
- ・対照実験を設定し、だ液のはたらきを調べることができる。(観察・実験の技能・表現)
- ・だ液による消化の実験などを行い、動物の体には消化液のはたらきで栄養分を分解するしくみがあることを理解する。また、消化された栄養分が小腸から吸収されるしくみについて理解する。(自然事象についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点(視点)

- ① 指導法の工夫(興味・関心、知識・理解の定着および思考への導入のため)
 - ・導入時にこれまでの学習をプロジェクターを用いてデジタルコンテンツ(ビデオ教材)で振り返ることで視覚的な効果を利用して興味・関心を高めるとともに復習を行った。
 - ・設問をプレゼンテーションソフトで制作し、授業の流れを切らすことなく設問に答えることで集中力を保ち、理解の定着を図った。また、課題設定の際にも画像をプロジェクターで投影することで、課題をしっかりと認識させるとともに考察のためのヒントを与えた。
- ② 理科的活動の工夫(思考力・表現力を高めるために)
 - ・予想と考察の時間を十分に設け、また、結果及び考察の発表の時間を確保した。
 - ・生徒に必ず結果や考察の発表があることを確認させてから実施した。
 - ・適切に表現する力を高めるために、ワークシートの型枠の表現方法に従って発表するなど発表方法を統一させた。
- ③ 学習定着のための工夫(知識・理解の定着)
 - ・小単元ごとに小テストの導入と復習の時間の確保した。
 - ・思考力が求められる問題を授業中で実施した。

B-1 単元の指導・評価計画

B-2 指導法の工夫

3 指導の実際

学習活動	教師の働きかけと生徒の反応(☆は支援)	評価場面・観点・方法
<p>◇導入 ビデオコンテンツとプレゼンソフトを利用した復習。</p> <p>◇課題、設問提示 プロジェクター投影された小腸の模式図を見て説明を聞き、本時の学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>小腸の壁にたくさんの柔毛があるということは、栄養分を吸収するうえで、どのようにつごうがよいだろうか。</p> </div> <p>◇考察、班活動 ・個人用ワークシートに自分の考えを記入する。 ・班全体で考えをまとめ、発表用ワークシートに記入する。 ・班代表の発表</p> <p>◇確認、振り返り ・ビデオコンテンツで確認する。</p>	<p>・ポイントの指示と質問の予告をする。 ☆答えが出やすいように質問し、出ないようであればヒントを与える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>☆他に意見を求めないように促し、机間指導をする。また、ヒントを与える。 ○表面積が広がり、良く吸収できる ○ゆっくりと物質を送れる。 ・聞く体制がとれるように注意する。</p> </div> <p>・注目点を指示する。</p>	<p>◆科学的な思考 小腸の内側に多数の柔毛がある理由を栄養分の効率的な吸収と関連づけて考察することができる。 【行動観察・ワークシート】</p>

C-1 指導案

C-2 ワークシート

C-3 視聴覚教材・コンテンツ

4 成果と課題

(1) 成果

言葉だけの質問では簡単な復習でも問題を把握できない生徒が多く、質問を繰り返すことが多かったが、今回のプロジェクター投影した画面上の設問にはすんなりと答えることができていた。また、テンポ良く授業が進められ、課題提示後の考察の時間に余裕が持てた。

個人の考察の場面で、自分の考えをワークシートに記入できたのは31名（表面積が増えて吸収効率が高くなる：5名、たくさん吸収できる：19名・食物がゆっくり通る：4名、その他：3名）であり、無記入は4名であった。課題提示の直後には何を書いてよいか分からなかった生徒も、机間支援で「小さい物がたくさんあることでの例は1年時の植物の時間に習っている」というヒントを与えることで多くが記入し始め、「表面積が広がる」という意味の言葉を書き足した生徒もいた。『まず自分の考えを表現する』という目的においては一定の成果があったといえるが、課題自体が平易であったことや、ヒントがあって書き始めたことについては、教師の課題の出し方や生徒のこれまでの知識、そして表現力が不十分であるといえる。

班での考察では、おおよそ目標に達成できた状態であり、発想の幅を広げることや知識の確認につながったと思われる。また、発表では、これまでの経験やワークシートでのヒントもあり、誰もが適切な表現で発言できていた。

(2) 課題

この実践では、科学的に思考するための支援の一例を提示したのに過ぎない、また、今回は実験・観察の結果からの考察ではないので、これについても検討しなければならない。

考察する場面の経験を積むことで、これまでの知識を活用することや実験・観察の結果を踏まえて段階的に思考する方法に慣れ、自らの思考力を高められると考えられる。今後も更に、思考力の向上につながる工夫を模索し、実践していく必要がある。また、どんな表現方法が人に伝わる表現であるかを共同で考えることなどを通して、表現する力をつけられるようにしたい。

事例 33 単元「いろいろな動物」

せきつい動物の学習で習得した見方・考え方や 知識・技能を活用した無せきつい動物の観察

理科 第2学年

内灘町立内灘中学校

1 事例の概要

「自分の考えをもち、関わり合い、深め合う授業の工夫」を研究主題として、活用力(思考力・判断力・表現力等)の向上を目的に今年度より学校研究を進めている。本校の実態として、学力調査等の分析から活用力に弱い部分があることがわかってきた。これを受けて、「①学習場面に応じた指導・教材の工夫、②課題解決型の授業設計、③個人思考・集団思考の設定と補助発問の導入、④聴き方・話し方の指導の工夫」の4つを視点に授業づくりを行うことにした。各教科部会では教科における思考力・判断力・表現力を洗い出し、指導のあり方について具体化を進めている。

本実践では、せきつい動物の学習を通して習得した見方・考え方や知識・技能を活用して、無せきつい動物である二枚貝を観察した。主に思考力・表現力の向上をねらったものである。なお、移行措置で平成22年度から追加される内容であり、発展的内容として先行実施した。

A-1 学校研究における授業の視点

A-2 各教科における思考力・判断力・表現力の捉え

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・自然界にはさまざまな動物が生活していることに気づき、進んでそれらの特徴を調べてみようとする。(自然事象に関する関心・意欲・態度)
- ・せきつい動物の体のつくりやふえ方などの特徴が、その動物の生活のしかたと関係が深いことに気づくことができる。(科学的な思考)
- ・身近な動物の生活や体の特徴を表などにまとめることができる。(観察・実験の技能・表現)
- ・せきつい動物の5つのなかまの特徴を説明し、身近に見られる種類をあげることができる。(自然事象に関する知識・理解)

(2) 指導上の工夫点

学校研究の授業づくりの視点に位置づけて、工夫点をあげる。

① 学習場面に応じた指導・教材の工夫

- ・砂へのもぐり込みの観察には、運動が活発なフジノハナガイを用いる。波打ち際にすむフジノハナガイは小型であり、多くの生徒が海水浴等で見た経験をもつ身近な素材である。
- ・導入やまとめでビデオ映像を効果的に用いて、目的意識をもたせたり思考を深めさせる。
- ・観察結果や発表の際に教材提示装置を使い、わかりやすく説得力のある発表につなげる。

② 課題解決型の授業設計

- ・せきつい動物の学習で習得した見方・考え方や知識・技能(食う・食われるの関係、環境に適応するための様々な戦略、生物の多様性、連続性など)を用いて、無せきつい動物の巧みなしくみに気づかせる。
- ・観察時に個別課題を設定させることで、観察への目的意識を高めさせる。

③ 個人思考(考えを持つ場)・集団思考(関わり合い深め合う場)の設定と補助発問の導入


- ・個人思考では、書く活動(本時ではレポート)を取り入れる。書く活動には、「意識的に考えさせる」「考えを自分の言葉で表現させる」「教師が思考を把握できる」等の意図がある。
- ・集団思考では、補助発問を行う。補助発問には、ゆさぶりをかけて深めるねらいがある。

④ 聴き方・話し方の指導の工夫

・結論先行型の話し方で発表をつなぐことで、表現力の向上や思考の深まりをねらう。

B-1 ビデオ映像の内容

3 指導の実際

学 習 活 動		支援(・) 指導上の留意点(*) 評価(◆)
4	課題設定 観察1と観察2の課題を知る。	
<p>観察1 フジノハナガイは、体のどの部分をどのように使ってもぐっていくか？</p> <p>観察2 ハマガリの体を調べて、せきつい動物と似ている点をさがそう —ぜひ、〇〇をみつけてやろう—</p>		
8	観察2の個別課題として、「自分がみつきたい器官」の名前を書く。	*解剖図を与え、手を使って解剖するよう伝える。
9	個人思考 観察2をはじめ、観察できたものをスケッチする。 書く活動	・みつけられた器官、興味をもった部分のみ、スケッチさせる。
10	集団思考 観察1と観察2の結果を、教材提示装置でスケッチと実物を示しながら発表する。	◆各部の様子やそれに対する考察を図や文章、言葉で表現することができる。(観察・実験の技能・表現) <発表・観察・レポート>
<p>フジノハナガイは、はじめ白いひらひらしたものをい出して、これをのぼして砂をほりおこしました。そして、貝がらをもぐっていきました。</p>  <p>私は心臓を見つけました。ヒトと同じように、貝にも血液があることがわかりました。</p> <p>僕はえらを見つけました。このようにヒダヒダになっていて、魚類と同じ形なのがわかりました。</p> <p>ハマグリは、どうやって食べ物をとっているか？</p> <p>口をバクバク開いて捕まえるのかもしれない。 白い筋肉で捕まえて食べるのではないか。</p>		*実物を指さしながら話すなど、わかりやすい発表につながるポイントを指摘する。
11	まとめ 入水管から水を吸って出水管からはき出すビデオ映像をみて、二枚貝が生活環境に適した体をもつことを知る。	*入水管と出水管によって、二枚貝はえらに水をぶつけて酸素を吸収すると同時に、水中のプランクトンを吸い寄せて食べることに気づかせる。
12	振り返りとして、「わかったこと」「感じたこと」を書く。	

C-1 指導案

C-2 ワークシート

4 成果と課題

(1) 成果

- ・導入で書いた二枚貝に関する疑問や観察したい事項には、「脳、呼吸、食性、心臓、感覚器、生殖など」のせきつい動物の学習で得た見方・考え方が多くあげられた。
- ・教材提示装置で実物やレポートを示しながら発表することで、説得力のある発表になった。また、他の生徒の発表を聞いて、自分が見つけられなかった事項に気づくことができた。
- ・心臓や胃、腸などをみつきたいとする生徒が大部分で、その多くは目的を達成できた。
- ・観察や発表を通して、「二枚貝のシンプルで巧みな体のしくみとはたらき」に気づいた。終末での補助発問とビデオ映像は、思考を深めるために有効であった。

(2) 課題

- ・レポートを分析すると、図と文章による表現力は生徒間でかなり差がみられた。これについては、全ての教科で継続的に共通の取り組みをしていくことが必要である。

たくさんの酸素を取り入れるためにはどちらの肺がよいか考えよう

理科 第2学年

宝達志水町立押水中学校

1 事例の概要

全国学力・学習状況調査結果及び県基礎学力調査結果から、本校の生徒は知識・理解の正答率が高いが、情報を比較・分類して読み取ったり、課題と結果を関連付けて考察したりすることや、根拠をもとに説明する力が十分でない。また短い語句で説明することはできるが、条件に合わせて自分の考えを組み立てて表現することも苦手としている。

そこで、生徒の興味・関心を高め、比較して思考できる教材を工夫した。さらに、学習形態を工夫して個で考える場面とグループでまとめる場面を設定するとともに、言葉だけでなく図を用いて表現する活動を取り入れた。

A-1 学校研究

2 実践内容

(1) 単元の目標

- 消化や呼吸、血液循環についての観察・実験を行い、そのしくみについて、意欲的に調べようとする。
(自然現象への関心、意欲、態度)
- 消化や呼吸、血液循環についての観察・実験を行い、動物のからだには、必要な物質を取り入れて運搬し、不要な物質を排出するしくみがあることを各器官のつくりと関連づけてとらえることができる。
(科学的な思考)
- 消化や呼吸、血液循環についての観察・実験を通して、その特徴を調べまとめることができる。
(観察・実験の技能・表現)
- 動物のからだには、必要な物質を取り入れて運搬し、不要な物質を排出するしくみがあることを理解できる。
(知識・理解)

(2) 指導上の工夫点（視点）

① 課題設定・教材の工夫

- 生徒に疑問を持たせ、学習への関心を高めさせるとともに、学習を積み重ねることによって結論へと結びつくようにするために、2種類の肺のモデルを作成した。
- 生徒が課題の意味を理解し、自分の考えを持てるように、わかりやすい表現を工夫した。

② 授業展開の工夫

- 生徒自身が観察・実験の手がかりを考えられるように、課題について思考させる場面を大切にした。

B-1 単元・評価計画

B-2 肺のモデル

3 指導の実際

導入時に自動車と関連づけ、ヒトも運動や体温を保つためにエネルギーを必要とすること、そのために養分と呼吸が関係していることを意識させ、肺のつくりがどのようなになっているかという課題につなげた。

肺胞のつくりがある肺と、ない肺の2種類のモデルを作成し、「たくさんの酸素を取り入れるた

めにはどちらの肺がよいか考えよう。」という課題を提示した。モデルを比較して特徴の違いを明らかにさせ、その違いによってガス交換とどんな関連があるかを考え、個人やグループで肺のつくりについてまとめた。その後モデルを解体して検証した。

学習内容・活動	支援（・） 評価○《評価方法》
1 これまでの学習を復習する。	<ul style="list-style-type: none"> ・紙で表したヒトのモデルを掲示し、養分の吸収や運搬を確認する。 ・自動車を例にあげ、ヒトがエネルギーを得るために呼吸が関係していることに気づくようにする。 ・2種類の肺のモデルを提示する。
2 吸収した養分からエネルギーをつくるしくみに酸素が使われていることをつかむ。	
3 本時の課題をつかむ。	
<p>たくさんの酸素を取り入れるためにはどちらの肺がよいか考えよう。</p>	
4 2種類の肺を比較して、その違いからどちらの肺がよいかを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・肺の形状の違いと選んだ理由も明らかにするように促す。 ○評価観点（科学的な思考）《発表・ワークシート》
5 表面積が広がっていることを確かめる。	
6 まとめと自己評価をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・肺胞、表面積など学習のキーワードを押さえる。

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

① 課題設定・教材の工夫

- ・視覚に訴えるモデルを活用したことにより、「なぜ」「どうして」という疑問を持ち、知りたいという意欲が高まり、「主体的な学習」が少しずつできるようになってきた。
- ・教材をもとに比較検討する学習場面を設定したことで、生徒が具体的に何を考えればよいか見通しをもって学習を積み重ねることができた。

② 授業展開の工夫

- ・自分の考えをもったことで、グループでの話し合いでも根拠を添えて説明することができ、表現力の向上が見られた。
- ・モデルを解体して面積を比較したことで、自分の考えが正しかったかどうかを検証でき、実感をともなった知識・理解になった。

(2) 課題

- ・自分の考えが持てない生徒に対しては、具体的な補助資料を用意するなど個に応じた指導をさらに工夫する必要がある。
- ・導入時の自分の考えを持たせる場面では提示する教材だけでなく、生徒の生活の中での経験など思考を助けるための話題や資料をさらに工夫する必要がある。

学び合いの中で「思考力」を高める授業実践

理科 第3学年
津幡町立津幡中学校

1 事例の概要

津幡中学校では、「意欲を持って主体的に学ぶ生徒の育成」—『活用力』の向上をめざして—という研究主題のもと、授業実践に取り組んでいる。

昨年度の生徒の実態から、本校生徒につけたい力として次の点が明らかになった。

- *あきらめず探究する力
- *自分で考え、工夫する力
- *人の話、考えをしっかりと聴き、自分の考えを自分の言葉で表現できる力
- *学んだことを活かそうとする力

これらは、「活用力」に共通するものと考え、各教科における「活用力」の捉え方について協議したうえで、習得したことを活用する学習活動に取り組むことにした。

そこで、授業づくりとして、単元計画のなかに習得したことを活用する学習活動を意識して設定すること、課題解決型の授業を組み立てること、その中で、「学び合い」の場（生徒一人ひとりが課題に対する考えを持ち、互いが関わりあうことで個々の学びを深めることができる場）を大切にしていくことを校内で共通理解し、取り組んできた。

A-1 学校研究

A-2 活用力の捉え方一覧

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・太陽や星座の動きを観察しようとしたり、それらの写真を撮影しようとする。
(自然事象への関心・意欲・態度)
- ・太陽や星座の見かけの動きや四季の星座の移り変わりなどの現象が、地球の自転・公転によって起こることを推論できる。
(科学的な思考)
- ・透明半球やモデル実験、図を用いて、天体の見かけの運動を調べることができる。
(観察・実験の技能・表現)
- ・天体の日周運動や年周運動を、地球の自転・公転から説明することができる。
(自然事象についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点

- ・「活用力」を高める工夫として、学習課題を生徒の思考活動が促されるように多段階に分けた。本時では、以下のようなステップとし、③の理論的考察を活動の中心として据える。
 - ①身近な場所の方位・・・方位磁針の使い方を確認する。
 - ②地球儀上での方位・・・地球上では、北極の方位が北であることを確認する。
 - ③日の出、日の入りの方位・・・日本の位置が変わったとき、太陽のある方角を確認することにより、「太陽は東から昇り、西に沈む」と照らし合わせる。
- ・方位シールを補助教材として用いて、観測者である自分の位置・方位をしっかりと認識させる。
- ・立体がイメージしやすいよう、地球儀を班に1体用意する。班での話し合いの中で思考力が向上するよう支援する。

B-1 単元指導評価計画

3 指導の実際

配時	生徒の学習活動	教師の支援（・）と評価（◎）
つかむ	<ul style="list-style-type: none"> ・学校周辺の建造物の方位を調べる。 ・地球（儀）上での方位を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・方位磁石の正しい使い方を確認する。 ・北極星の存在を知らせる。
追求する	<ul style="list-style-type: none"> ・「地球は自転している」ことを確認する。 ・本時の課題を確認する。 <p style="text-align: center;">〈日の出・日の入りが見られるのは 日本がどの位置にあるときでしょう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを書く。 ・班で話し合い、考えを発表する。 ・他班の発表を聞いた感想や、自分の考えの変化を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自転の向きにはふれない。 <p>◎方位が理解できていて、太陽が東から昇り西にしずむことを図とあわせて立体的に考えている。（科学的思考）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太陽が東にあるときが「日の出（朝）」であり、太陽が西にあるときが「日の入り（夕）」である。 ・地球の自転の向きを考えさせる。
深める	<ul style="list-style-type: none"> ・太陽系シュミレーターで学習内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地球の自転により、昼と夜がやってくることを映像で確認する。

C-1 指導案

C-2 ワークシート

4 成果と課題

(1) 成果

生徒達の普通の授業中の様子は、自然現象に対しても深く考えることなく、あたりまえのこととして捉えてしまう生徒が多く、結果を予想させる場面では「勘で・・・」と答えたり、理由を考えさせると「難しくてわからない」と投げ出したりすることもある。今回の実践は、生徒の科学的な思考力を養うことを中心に据えたものであり、次の点で成果が見られた。

- ・スモールステップを設定し、各ステップでの既習事項を活用しながら学習を進めることで、多くの生徒の思考力向上が見られた。
- ・中心課題ではグループでの学び合いを取り入れることにより、意見のちがう友人に対し一生懸命に説得する生徒の姿も見られた。考えることが苦手な生徒も、学び合いの中で思考が深められ、また、思考力がある生徒は、友人に教えることにより、表現力の向上も図れたと考える。

今回は天文分野についての取り組みであるが、今後は、その他の分野においても、学び合いの中で、生徒が意欲的に授業に参加し、主体的に課題に取り組めるよう支援していきたい。そのような中で、思考力、表現力などの『活用力』の向上が期待できると考える。

(2) 課題

前ステップで学習したことが、次のステップの課題と関連づけられずに、うまく活用できないグループがあったことは事実である。また、個々の意見を持ち合ったグループの話し合いで、より考えが深められたとしても、表現力不足のため、うまく発表できない生徒もいた。そこで、次の点が課題としてあげられる。

- ・2つの事柄を関連づけて考えたり、論理的に説明したりする力をつける必要がある。
- ・「考え」を発表するときには違いを比較したり、条件を統一して述べたりするなど、表現力の向上も支援していきたい。

混声合唱の喜び

音楽 第3学年

白山市立北星中学校

1 事例の概要

本校では昨年度まで生徒の「生きる力」を育むことを研究の支柱としてきたが、今年度は昨年度の学校評価をうけて学力向上に向け、副題を「活用力を高める授業の研究」とした。そこで音楽科において、生徒自身が自ら感じたことをもとにして、主体的に考え、工夫をしながら音楽づくりをしていく活動の中で、活用力を高めることができるのではないかと考えた。本題材では、生徒自身が合唱を創りあげていく過程で、思考する場面や判断する場面と表現する場面を意図的に設定することで、より積極的な合唱活動に繋がり、互いに向上しようとする力がつくと考えた。また11月に行われる文化発表会という学校行事の中で生かされるという点において、生徒の学習意欲も喚起されるものと考え、本題材を設定した。以下はその試みの一部である。

A-1 学校研究

2 実践内容

(1) 題材の目標

- ・歌詞の内容と声部の役割及び楽曲構成のかかわりに関心をもち、意欲的に合唱活動に取り組むことができる。
- ・歌詞の内容や曲想を感じ取り、声部の役割や楽曲構成を生かして、全体の響きに調和した合唱表現を工夫することができる。
- ・声部の役割や楽曲構成を理解して、全体の響きに調和させて合唱することができる。

(2) 指導上の工夫点

① 練習形態の工夫

- ・パート練習（自分のパートの音取り）、小グループ練習（他のパートとの響きの確認）、全体練習（全体の響きの調和）とそれぞれ目的に応じた3つの練習形態を編成した。

② 練習方法の工夫

- ・各声部の歌唱CDとピアノ伴奏のCDの他に、複数の声部を重ねた歌唱CDの3種類のCDを準備し、それらの中から適切なCDを生徒が選択しながら、自己の声部と全体の響きの調和を図りながら、合唱表現を工夫できるようにした。

③ 基礎・基本の定着

- ・自分のパートの楽譜の部分を蛍光ペンでなぞらせ、音の上がり下がりを目で確認させた。
- ・一人一人の生徒の音域をパート分けのために事前に調査し、声域の狭い生徒についてはオクターブ下げて歌う等指示することで、変声期の生徒に配慮し、歌唱への抵抗感を和らげた。

④ 活用力の育成

- ・パート練習の際に、自分の歌唱について、うまく歌えた部分とそうでない部分を把握・分析し、次時への課題を意識することができる。（思考力）
- ・グループ練習の際に、自分たちの合唱を生徒相互に聴き合いながら、問題点やよりよくなる方法を出し合い、適切な練習方法を取り入れ、改善に努めることができる。（思考力・判断力）
- ・グループ練習の発表の際に、自分たちが取り組んできた練習を具体的に述べて、歌唱の発表の視点を明確にすることができる。（表現力）

B-1 単元計画・評価計画

B-2 指導法の工夫

3 指導の実際

学習活動(・)と予想される生徒の反応(○)	指導と評価方法 (※B→Cへの支援、☆活用力)
<ul style="list-style-type: none"> ・小グループの確認をする <ul style="list-style-type: none"> ○うまく歌えるか心配だ <ul style="list-style-type: none"> ①音程がわからない ②音程の取れない場所がある ③声が小さくなる ◇恥ずかしい ・小グループでの、合唱活動を行う <ul style="list-style-type: none"> ○ピアノ伴奏のCDで練習する ○パートの声が入ったCDで練習する ○電気ピアノで音取りをする ○パート間の距離を变化する ○先生を呼んで一緒に歌う ・パートリーダーを中心に相談しながら、合唱活動を行う ・伴奏係が電気ピアノで音程の不安定な部分を取り出して模奏する 	<ul style="list-style-type: none"> ・うまく歌えない場合の練習方法を例示する <ul style="list-style-type: none"> ①自分のパートの声が入っているCDで練習する ②電気ピアノを弾いて音を確認する ③声パート間の距離を空けて練習する ◇横で教師と一緒に歌うので、挙手等で連絡する <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>☆グループ練習の際に、自分たちの合唱を相互に聴き合いながら、問題点やよりよくなる方法を出し合い、適切な練習方法を取り入れ、改善に努めることができる(思考力・判断力)</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0; text-align: center;"> <p>評価規準</p> <p>・各声部の役割を生かして、全体の響きに調和した合唱表現を工夫している</p> <p><評価方法> 観察</p> </div> <p>※他の声部につられてしまう生徒には、音程の安定している生徒の隣や前で歌わせるよう並び方を工夫し、全体の響きを感じ取りながら歌えるよう指導する</p>

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

① 主体的な学習活動

練習形態や練習方法を生徒の気付きや相互評価を生かしながら試行錯誤させていくことによって、自ら課題を解決しようとする意欲の高まりと主体的に授業にかかわる能動的な態度が多く見られるようになった。

② 個人の高まり

小グループ練習の導入により、一人一人がしっかり歌うようになり、また小グループの発表のため、協力しながら合唱に取り組む活動の様子が見られた。さらに、発表を聴く視点を聴き手が知ること、その工夫のよさを聴こうする能動的な聴き方をするようになった。また、感想についても観点が絞られた評価カードが見られるようになった。

(2) 課題

① 音楽リーダーの育成

小グループの練習では、生徒に任せる部分が多いので、グループリーダーや構成メンバーによって練習の質が変わってくる。第1、2学年の学習活動を通して、「音楽活動の基礎的な能力」を生徒に身に付けさせ、その能力を生かし主体的に学習活動を行うことができるリーダーを育成しておくことが大切である。

② 計画的な活用力の育成

音楽科の授業における合唱活動においても、既習の学びを本時の学習等に生かしていけるような学習指導計画の工夫が大切である。また活用力の育成という面で、それぞれの題材で育みたい「音楽活動の基礎的な能力」を明確にし、既習によって身に付けた「表現の技能」との関連を図りながら、活用力育成につながる系統的な学習指導計画の作成が重要である。

事例37 単元「マイミュージアムをつくろう」

R—P D C Aを用いた美術科の鑑賞授業を通してはぐくむ活用力 ～学校研究の取組から～

美術 第3学年
羽咋市立邑知中学校

1 事例の概要

(1) 本校の学校研究の概要

研究主題 個に応じた指導を通して、確かな力を身につける生徒の育成

副主題 『邑知システム』と『邑知システムを支える環境づくり』の実践・検証を通して

本校では「知・徳・体」の調和のとれた教育活動の推進と合わせて、平成14年～16年「文部科学省委嘱事業・学力向上フロンティアスクール事業」及び平成17年～19年「文部科学省委嘱事業・学力向上拠点形成事業」の指定研究の取組を通して、特に「確かな学力」の育成と定着に力を注いできた。その中で練り上げられてきた学力向上策が『邑知システム』であり、その支援策として作り上げられたのが『邑知システムを支える環境づくり』である。これらは、「生きる力」を具現化する方法として、学校内だけでなく家庭や地域にも浸透してきており、特に学力の向上（基礎的・基本的な学習内容の定着）において成果を上げている。

今年度はこれまでの成果と課題を踏まえた上で上記の研究主題を設定し、「確かな力（確かな学力・豊かな心・健やかな体）」の調和の実現をめざした。7年目の実践となった『邑知システム』と『邑知システムを支える環境づくり』の手法を中心に、今年度指定を受けた「平成20年度児童生徒の「活用力」向上モデル事業・推進モデル校」の内容を踏まえ、学力面における「基礎・基本」及び「活用力」の定着』を中心課題として、より確かな問題解決能力につながっていくよう全教科で実践中である。なお本稿で紹介する美術科の実践は本学校研究に基づいて行われたものである。

(2) 美術科を通してはぐくむ活用力 (Research-Plan)

表現活動は問題解決学習そのものであるために、本校がはぐくもうとしている思考力・判断力・表現力等については、これまでもその実践を重ねてきているとあってよい。しかしながらこれまでの学びや実態をみると、表現活動はもちろんであるが、鑑賞活動の中で活用力に関する実践を行う余地が十分にあると考えた。そこで中教審で示された活動例を参考に、1～3学年の鑑賞授業の中でその具体化を試みた。そして本校美術科が活用力の具体例としてとらえた以下の2つの力が段階的に身につけていくよう、学校研究に即した形での効果的な場面設定を行っていくこととした。

- ・「自分の価値意識をもとに、自分なりの意味や価値をつくりだす際に働く力・想いを深める力」
- ・「自分の思いを大切にしながら、言語や造形表現として表出したり、批評したりする力」

<本校の学校研究の概要>

- A-1 めざす生徒像と指定研究を通して育てたい生徒のゴールイメージ
- A-2 「生きる力」の自校化と『邑知システム』『邑知システムを支える環境づくり』の位置付け
- A-3 本研究の仮説（活用力を身につけた生徒の実現に向けて）
- A-4 『邑知システム』と『邑知システムを支える環境づくり』について
- A-5 本校の活用力育成に向けたイメージ
- A-6 活用力の育成に向けた『邑知システム』の取組について
- A-7 活用力の育成に向けた<アウトプットー表出の場面>の取組について
- A-8 『邑知システムを支える環境づくり』の取組について

2 実践内容 (Research-Plan)

美術科 3年「マイミュージアムをつくろう」

- B-1 題材の目標
- B-2 題材計画
- B-3 指導法の工夫 (題材観・生徒観・指導観・評価観)

3 指導の実際 (Do)

- C-1 指導案 (B-2 題材計画の第三次の一時間目)
- C-2 どこでもミュージアムPART Iの様子
- C-3 生徒の学びの成果

4 成果と課題、そして新たな手だての構築へ

(1) 成果 (Check)

- ・思考力、判断力、表現力等について

C-3の成果からも分かるように、「みる」際に思考力・判断力・表現力等を働かせて取り組んでいたことが十分に伺える。生徒自身にもそれらを学び、力をつけたという実感があることから、この実践が生徒の活用力を伸ばしたと言ってよいだろう。

- ・言語活動の充実について

美術科における言語活動の充実という視点では、色や形についての意識の高まりが、造形言語の表出として、生徒の言葉から読み取ることができるようになった。

(2) 課題 (Check)

- ・評価について

生徒の活用力の育ちについて、今回の実践では「生徒の意識の変化」と「造形言語の質の深まり」という観点から見取りを行った。評価規準の見直しも含めて、多角的にその育ちをとらえることができるようにしていかなければならないと考えている。

(3) 新たな手だての構築へ (Action)

① 基礎・基本の更なる定着について

活用力をはぐくむ場面をより効果的にしていくためには、基礎・基本の確実な定着が必要であることを再確認することができた。計画の中に位置づけた活用力をはぐくむ活動を支え、深めていくための基礎・基本の学習内容を再点検し、その充実も図っていかねばならない。また、今以上に教師自身が基礎・基本の定着と活用力の育成との双方向の関係を意識した中で、授業改善を図っていかねばならない。

② 教材の系統化と生徒の学びの実感について

今回の成果のあった取組を系統化して、他学年にも広がっていくように年間計画の中で位置づけていきたい。そしてそれを学んでいく生徒自身に『学びの実感 (活用力の面白さの実感)』が深まっていくような授業改善の工夫を次年度は整備していきたい。

③ 評価について

生徒の育ちを見取る手がかりとなる資料の収集の更なる充実を図っていく。

事例38 単元「PROGRAM 5 由紀、シアトルに行く。」

英語で頼んだことが友達に伝わって、応じてくれた

英語 第1学年

野々市町立布水中学校

1 事例の概要

本校は、平成20年度より県の児童生徒の「活用力」向上モデル事業の指定を受け、「自ら学び、自己を高める生徒の育成 ～基礎的、基本的な知識・技能の習得を図り、「生きる力」を育む授業づくり～」をテーマとして研究実践を進めている。教科としても、この方針に沿って研究を進めてきた。

本年度の基礎学力調査結果の分析を踏まえると、英語科では書くことの領域における表現の能力に関する問題、知識・理解に関する問題について課題が見られた。また、1年生の授業においては、落ち着いた学習態度でペア活動や音読発表には前向きに取り組むが、英語らしい発音やイントネーションで表現したり気持ちを込めて表現したりすることが不十分である。それは関心・意欲・態度に課題があると同時に、言語材料の定着や基本的な技能の定着に課題があるためである。

このような現状分析のもと、英語科では基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る学習活動を工夫するとともに、これらを活用して意思の伝達を行う言語活動と関連させながら、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得をめざすこととした。

A-1 学校研究の概要

A-2 研究の構想図

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・飛行機の中や空港での対話のロールプレイングにおいてペアで協力しながら積極的に取り組もうとする。(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- ・発音に注意して英文の内容が伝わるように音読したり、命令文や疑問詞で始まる疑問文を状況に応じて正しく言ったりできる。(表現の能力)
- ・話し手の指示や尋ねたい内容を正しく理解し、適切に応じることができる。(理解の能力)
- ・命令文や位置を表す前置詞の形・意味・用法がわかる。(言語や文化についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点(視点)

① 「学ぶ意欲を高める」

- ・授業導入時における工夫
教材の提示方法を工夫し、生徒の意欲を喚起する。
- ・肯定的な声かけ
生徒の意欲的な姿勢を惜しみなくほめる。
- ・「がんばりシール」
- ・生徒作品を用いた学習の展開
- ・生徒の思考の流れを見通した授業の組み立て
活発な時間と静かな時間を意識して作る。

② 「学びの共同体」

- ・掲示の工夫
単元の学習の流れがわかるように、生徒の作品を掲示する。
- ・小グループでの話し合い

3、4人のグループで意見を発表する形態を取り入れ、慣れ親しませる。

・自己評価表の導入

授業評価をし、自己の変容を見つめるためのふり返し学習を行う。

③「基礎の定着・基本の理解を徹底し、活用・応用をはかる」

・定期的な小テストの実施

・ペア学習の導入

・自己表現活動の充実

・生徒相互の学習理解の確認（プチティーチャー、ミニ先生）

B-1 指導法の工夫

3 指導の実際

過程	配時	生徒の活動 ・予想される生徒の反応	教師の指導、支援(●)と評価(数)
練習	10分	4. 命令文を練習する。 ①既習動詞をくり返し練習する。 ・単語がたくさん出てくるので、発音に自信がない。 ②命令文、否定命令文を用いて、状況にあった表現方法ができるようにする。 ・どんな言い方をすればよいかな。 ・動詞は強めた方がよさそうだ。 教材の提示方法の工夫	・リピートさせたり、絵をキューとして言わせたりするなど、活動に変化をつける。 命令文が正しく伝わるように適切に話している。(表現) ・please を加えているがぶっきらぼうな言い方と please はないけれど控えめな言い方を聞かせて比較・対照させ、言語形式だけでなく言い方も大切だとわかるようにする。 ・全体練習からペア練習へと移行する。
発展応用	15分	5. 命令文を活用して、自己表現をする。 ・ペアの友達と協力して、気持ちを込めてお互いに指示を出し合おう。	ペア活動・自己表現活動の充実 ・既習や新出の語彙を活用させる。 ・よい点を生徒に指摘させ、教師自らも認めるようにする。

C-1 指導案

C-2 研究授業の様子

C-3 授業整理会の様子

4 成果と課題

(1) 成果

- ・生徒授業アンケートの結果分析を丁寧に行い、次の授業づくりに生かすことで、生徒の学習意欲を高めたり、教師の授業改善につながるような学習展開を進めることができた。
- ・相手に理解してもらえるようにわかりやすく話す意識は芽生えてきた。
- ・新出の文法事項への系統を踏まえた導入を工夫したことによって、学習している単元で習った文法事項ばかりでなく、既習の表現も活用しようとする生徒が出てきた。

(2) 課題

- ・単元指導計画、板書計画をさらに思考の流れに沿って構築する必要がある。
- ・思考力・判断力・表現力などをさらに高めるため、今以上に教師が意図的に思考・判断・表現する場面を設定し、考えさせる場をもつ必要がある。
- ・言語材料の習得を確実なものにするために、それらを活用する言語活動のより一層の工夫が求められる。
- ・まとまりのある英文を即興的に、あるいは短時間で理解したり、表現したりすることができるよう、言語活動の質を徐々に向上しなくてはならない。
- ・自己表現活動は充実してきたが、コミュニケーション能力を育成するためには、目的意識や相手意識などの言語意識をさらに高めなくてはならない。

スキットづくりを通じた表現力の育成

英語 第2学年

輪島市立南志見中学校

1 事例の概要

本校では『確かな学力の向上につなげる「活用力」の育成』を研究主題として研究を進めている。活用力（思考・判断・表現力）を伸ばすための授業研究を推進する中で、個々の生徒に習得した知識や技能を活用する楽しさや有用性を実感させ、その積み重ねを通じて確かな学力の育成をめざしたいと考えている。まずは活用力のとらえについて全教員で共通理解を図り、活用力が身に付いた生徒のイメージを明確にし、年間指導計画の見直しや単元計画を再構成し、各教科の特性を考えながら「考える場面」や「表現する場面」を可能な限り授業に取り入れる努力をしている。

英語科においては活用力が身に付いた生徒のイメージを「初歩的な英語を読んだり、聞いたりしてその概要をつかみ、それについて自分の意見や感想を英語で表現することができる生徒」とした。そのイメージに近づくためには、「テーマが与えられた場面で、自分の意見や感想を英語で話したり書いたりできる」必要がある。そのためのステップを3段階にわけて考えてみた。

ステップ1・・・自分や家族・友達などについて、事実を正確に表現できる。

ステップ2・・・自分のことについて自分の思いや考えを付け加えて表現できる。

ステップ3・・・人の意見を聞いたり読んだりして、それについて自分の意見を話したり書いたりできる。

本校の2年生は与えられた情報を正しく読み取ることはおおむねできるが、これまで読み取った情報をまとめて発表する機会が少なかったため、そのことに関して少し抵抗を感じている生徒がいる。今後はテーマを与えて自分の考えをまとめ、発表する活動を増やしていきたい。その活動形態もペア→グループ→全体と変化を持たせてできるだけ多く練習させ、表現力を身につけることを中心にして「活用力」を高めたいと考えている。

A-1 学校研究

A-2 活用力が身に付いた生徒のイメージ（英語）

2 実践内容

(1) 単元の目標

①接続詞 *that*、*when* を用いて簡単な対話をしようとする。

(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)

②新聞記事や投書の意見を読んで、簡単に自分の意見を述べることができる。

(表現の能力)

③新聞記事や投書を読んで、その内容を理解することができる。

(理解の能力)

④ *if* 節、*that* 節、*when* 節、*because* 節を用いた文の形・意味・用法を理解している。

(言語や文化についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点(視点)

活用力(特に表現力に重点をおいて)を意識した授業(本時)

○与えられたテーマについて自分の意見をまとめ、友達とスキットづくりをする活動を通して、習ったことを活用させる。また、発表の段階では3人で積極的に関わり合って考え、スキットの流れや内容を工夫するように指導する。作ったスキットについては、添削して生徒に返し、表現ノートにまとめさせる。

(Unit 5全体を通して)

○投書の意見を読んでその内容を理解し、それを参考に簡単に自分の意見をメッセージ性のある3文以上の英文で述べる。

○Speaking Plusの本文の一部を変えたり、付け加えたりして口頭練習をする。

3 指導の実際

(1) 単元名 Unit 5 A Park or a Parking Area ?

(2) ねらい if、that、when、because を用いて自分の意見を2文以上の英文で表す。

過程	配時	学習内容	評価(◆)と支援(◇)と留意点(※)
展開	30分	2. 課題を把握する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;"> テーマを読んで友達とスキット作りをしよう。 </div> 3. テーマを読んでみる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;"> We may have a cell phone now or should wait until we finish school. </div> 4. 見えそうな表現を練習する。 5. ペアで対話文を作ってみる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;"> A ①私は～だと思ふ。 ②もし～なら、～だから。 ③あなたは どう思う？ B ①私もそう思う。 / 思わない。 ②なぜなら～だから。 </div> ワークシートに記入する。 6. 暗唱と発表	※意味を確認する。 ※スキットづくりのヒントとなる語句を口頭練習させる。 ◆ if、that、when、because を用いて自分の意見を2文以上の英文で表すことができる。(ワークシート) ◇【評価規準に到達していない生徒】わからない単語や表現について教える。 ◇【評価規準に到達している生徒】登場人物が3人のスキットづくりに挑戦させる。

C-1 指導案

C-2 指導と評価の計画

C-3 指導案(本時)

C-4 ワークシート

4 成果と課題

(1) 成果

投書の意見を読んで自分の意見を3文以上の英文で表すという活動については、テーマが自分たちとはかけ離れていたため、内容がうわべだけのものとなってしまったが、携帯電話という身近なテーマを与えたところ、生徒たちは熱心にスキットづくりに取り組むことができた。やはり興味・関心をひくテーマが必要である。

またスキットづくりで最も時間がかかる文章づくりを家庭学習にしたことや、あらかじめ生徒がつまづきそうな表現や単語をフラッシュカード等を使ってウォーミングアップでスピーディーに練習させたことで、書く活動・発表する活動に十分な時間が生まれ、ゆとりのある授業展開となった。その結果、個々の生徒が見通しを持って授業に取り組むことができ、よりよい表現をめざそうとする意欲や積極性が育ってきた。発表の段階では全員が自分の意見をしっかり述べる事ができた。

(2) 課題

テーマをもとに、自分の意見を持ち大きな声で発表することは、少しずつできるようになってきたが、さらによい発表にむけての工夫(アイコンタクト・表情・ジェスチャー)はまだ十分とは言えない。また、相手の話すことを問題意識を持って聞く習慣を身に付けさせ、コミュニケーションの内容を深めていく継続指導も必要である。そのためには、生徒が意欲的に表現したくなるような学習場面を、教師側がうまく仕組んでいかなければならない。当面は「表現する場面」の中心的な学習として2人のスキットづくりに慣れさせ、段階的に司会者をたてたグループ討議を取り入れ、3年次にはディベート形式の話し合いをさせたいと考えている。

適切な応答ができるようにしよう

英 語 第3学年
穴水町立穴水中学校

1 事例の概要

(1) 本校研究テーマ

本校生徒の実態から研究テーマを『一人ひとりの確かな学力の向上をめざして－基礎・基本の習得と活用力の向上－』と設定し、基礎的・基本的な知識・技能の習得と習得した知識や技能を活用した学習に取り組む必要があると考え、授業研究会を中心に研究を進めている。

(2) 3年生の実態と具体的な取り組み

英語科では研究のねらいを達成するため、①基礎的・基本的な知識・技能の定着（習得）、②日常生活で実際に起こり得る場面を想定したスピーキング活動（活用）に継続して取り組んでいる。

3年生は昨年度4月のNRTテストでは4領域の中で「話すこと」の問題の正答率が低く、一年間「話すこと」の力をつけることを目標に、「①対話文での基本文の導入」「②音読トレーニング」「③本文暗唱テスト」「④基本文型の定着を図る言語活動の工夫」「⑤スプリングテスト」の取組を行ってきた。その結果、今年度4月のNRTでは、課題であった「話すこと」の本校正答率（全国比 H19 0.5% ↓ ⇒ H20 11.2% ↑）がかなり向上した。しかし、「伝えたい内容を整理して伝える」、「適切な表現を用いて書く」という部分が弱かった。そこで本年度は、これまでの取組に加え、「伝えたいことを整理してわかりやすく伝える」という表現力の育成を目指し、表現活動に重点を置いて取り組むことにした。本事例は「話すこと」の取組例である。

A-1 学校研究

2 実践内容

(1) 単元の見どころ

- ・相手を誘ったり、提案したり、相手から求められた内容について適切に対応ができる。

(2) 指導計画と評価規準 【チャレンジコース】（本時 2/2）

時	ねらい (◎) と学習活動 (・)	評価規準
1	◎Would you like to ～? Shall we～? の形・意味・用法を理解している。 ◎本文の内容を理解できる。 ・対話の内容理解と目標表現を用いた応答練習をする。	・聞いた内容についてその概要をつかむことができる。 [理解の能力] ・相手を誘ったり、提案したりする場面において、相手や状況にふさわしい表現を理解している。 [言語や文化についての知識・理解]
2	◎相手を誘ったり、提案したり、相手から求められた内容について適切に対応することができる。 ・目標表現を用いてペアで対話をする。	・目標表現を用いたロールプレイに取り組もうとしている。 [コミュニケーションへの関心・意欲・態度] ・目標表現を用いて伝えたいことを正しく伝えたり、求められた内容について適切に応答することができる。 [表現の能力]

(3) 指導上の工夫

① 指導法の工夫

- ・習熟度別少人数授業
- ・習熟度に応じた発展的な学習

【チャレンジコース例】 本時（2/2）では、発展的な学習として誘いを受ける・断る場面での表現活動を取り入れた。場所や時間を決める、理由や日程の変更を提案するなどの英文を工夫させることで、話を継続する力、コミュニケーションを円滑にすすめる力を身につけさせたいと考えた。

- ② 学習内容定着のための工夫
- ・ 基礎的・基本的な知識・技能の定着のための音読トレーニング・暗唱の実施
 - ・ 活動場面での目標の設定
 - ・ 話す能力を高めるための表現活動の工夫
 - 日常生活での言語使用を想定した表現活動の重視
 - 目標達成のためのスモールステップの設定

3 指導の実際

* 評価 (●) と支援 (○)

<p>【Step2 対話練習】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 時間内にできるだけ多く練習するように練習回数の目標を設定する。
<p>交流する場面</p> <p>6 発表する。</p> <p>【Step3 発表と相互評価】</p> <p>① 発表Ⅰ（小グループ発表）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 発表 ・ 発表練習 <p>② 発表Ⅱ（全体発表）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 発表 ・ 相互評価 <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">* 発表態度はどうだったか</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">* 声の大きさ・速さは適切だったか</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">* 対話の流れはスムーズだったか</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>Yes: I'd love to. Where shall we meet? 行きたい気持ちを伝え、会う場所や時間などを決める。</p> <p>No: I'd love to, but I have other plans. 行きたいけど行けない理由を伝える。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ● 目標表現を用いたロールプレイに取り組もうとしている。(発表) ○ 活動に取り組もうとしていない場合は、視点を与えたり、他のペアの取り組みを参考にさせたり、適切な声かけをする。 途中で対話が止まる場合には、つなぎ言葉やあいづちを工夫しながら話を続けるようにアドバイスする。 ・ 発表で言えなかった部分を確認して、もう一度発表練習をさせる。 ・ 評価の観点を確認する。 ● 目標表現を用いて伝えたいことを正しく伝えたり、求められた内容について適切に応答することができる。(発表) ○ 誘うこと・提案することができていない場合は、目標表現を提示しリピートさせる。また求められたことに適切に応答ができていない場合は、話し手の質問の内容を確認し、それに対する適切な表現を提示し口頭練習をする。 ・ 工夫した会話をしているペアは認め、全体に紹介する。 ・ 円滑なコミュニケーションとなるために有効な手段や表現を確認して口頭練習をする。

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

- ① 課題確認後、自分の考えを持つ場を設定し、お互いに意見交換したことで、それを活かした文脈のあるスキット作り・発表ができた。
- ② 繰り返し表現活動に取り組むことで、辞書を使わない生徒が増え、本時でも一学期の既習表現を上手に使う簡単な英語で表現することができた。
- ③ 発表後の相互評価では「このような展開があるのか」、「・・・と言う表現がうまい」など、交流を通じた気づきがあり、自分のスキットの表現を見直すことにつながった。

(2) 課題

NRT や基礎学力調査、スピーキング活動等の結果から表現分野の改善が見られたが、場面や相手に応じて適切に表現する、まとまりのある内容をわかりやすく伝えるという点については課題が残る。その課題克服のためには、表現活動に必要な語彙や基本文の定着を図ることが必要である。そして、実際のコミュニケーションを想定した場面設定でのスピーキング活動、まとまりのある英文で自分の考えを表現するライティング活動に取り組み、学習した表現の運用能力を高めていきたい。

事例 41 単元「美術館・博物館で見てきたことを報告しよう」

『ことば力』向上 ～学び合いのできる生徒の育成を目指して～

総合的な学習の時間 第1学年

金沢市立城南中学校

1 事例の概要

本校では、平成18・19年度に石川県読解力向上推進事業研究校の指定を受け、「ことば力向上～読む・聞く・書く・話す力を高め、温かな交わりが出来る生徒の育成を目指して～」をテーマとして、また平成20・21年度に児童生徒の「活用力」向上モデル事業研究校の指定を受け、「ことば力向上～学び合いのできる生徒の育成を目指して～」をテーマとして研究実践を行ってきた。

本校では読む・聞く・書く・話すの4つの力を『ことば力』と定義した。この『ことば力』を向上させることにより、コミュニケーション力(人間関係力)が向上し、さらには学力が向上すると仮説を立てた。『ことば力』は国語の授業だけで身につくものではなく、全ての教科等で身につけるものである。そのため、本校では下記の生徒につけたい力を職員で共通理解し、全ての教科等で「ことば力向上」に取り組んでいる。

生徒につけたい力

① 読む・聞く（読解力・表現力）

- ・正確に理解し、書いてあることをもとにして推論し、熟考・評価するクリティカルシンキング、クリティカルリーディングができること

② 書く・話す（表現力・コミュニケーション力）

- ・テキストに基づいて自分の考えを書く力
- ・グループや全体の前で目的に応じて自分の意見を述べたり、発表したりできる力

2 実践内容

(1) 読書活動の推進

① 朝読書

② 毎週金曜日の朝に実施するリーディングタイム（今年2年目）

- ・A4程度の資料を読み、課題に応じて根拠をもとに自分の意見や考えを文章にまとめる。

③ 新聞記事を活用した授業

(2) 総合的な学習の時間のカリキュラムの工夫

① 「ことばの時間」の実施（各学年20時間）

- ・言語技術習得のための時間を確保する。
- ・生徒の習得した言語技術を教科の授業でも活用する。

② 知識や技能の活用場面の設定

- ・各教科で学んだ知識や技能を活用して、「話す・書く」活動を多角的に実施する。

(3) 授業改善

① コミュニケーション力を高めるグループ活動の導入

② 発問の工夫

- ・何のためにそのテキストを読むのか、そのテキストから何を読み取らせたいのかを明確にする質問が必要である。
- ・主体的に考え、判断しながら理解できるように、内容や意見を批判的にとらえさせる。

- ・資料を読み、根拠を明らかにして自分の考えを言ったり書いたりする。
例「感想を書きなさい」→「一番感動したことは何か、理由を含めて書きなさい」など

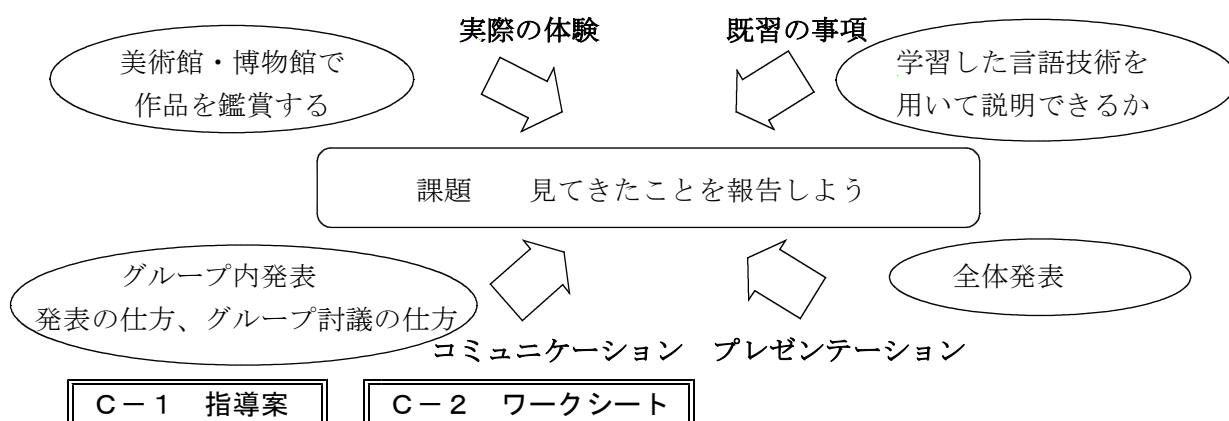
(4) 評価の工夫

- ① 定期テスト、実力テストなどで「読解力」を問う問題を出題する。
- ② 教科ごとにレポート作品での評価を行う。
- ③ スピーチやプレゼンテーションなど発表の評価を行う。

B-1	リーディングタイム課題一覧
B-3	評価問題例

B-2	ことばの時間カリキュラム
-----	--------------

3 指導の実例 総合的な学習の時間における「ことばの時間」指導実践例



4 成果と課題

(1) 成果

- ① 学力調査の結果から
現3年生は本校が「ことば力向上」の研究を始めた年に入学してきた。昨年、一昨年に比べて全国学力調査の「活用」の部分に点数の伸びが見られた。また、県・国の調査で全教科を通して、「思考・判断」「見方・考え方」「書くこと」の項目が特に高い正答率を示している。特に昨年度の課題であった、「資料やテキストを読み取る力が弱い」「文章を書く力が弱い」という傾向については、取組の結果、改善が見られた。
- ② 生徒の意識調査から
読解力(表現力)、言語技術、コミュニケーション力については多くの項目で6割の生徒が自信があると答えている。昨年までの意識調査を経年比較すると「力がついた」「自信がある」と感じている生徒が増加した。
- ③ 授業や作品から
 - ・発表の場を多く設定したことにより、全体的に発表する力がついた。
 - ・グループ活動や発表が円滑に行えるようになった。
 - ・文章を書くことに対する抵抗感がなくなり、表現力がついてきた。

(2) 課題

- ・『ことば力』を評価する問題の作成と実施、検証方法の工夫が必要である。
- ・思考すること、論述(討論・記述)することを面倒くさいと感じている生徒もいるため、今後も授業の中でグループでの討論や、思考し記述する時間を確保し、質の高いコミュニケーション力や記述力を育てていきたい。
- ・学んだことを日常の言葉遣いやコミュニケーションに生かす工夫をしていきたい。